

(別紙 1)

論文の内容の要旨

論文題目 エウエン語の接尾辞異形態交替規則と語幹の交替
氏名 鍛治 広真

本論文では接尾辞異形態の交替に関与する条件を一般化して記述することを目的として、ロシア連邦サハ共和国で話されるツングース語族言語であるエウエン語の接尾辞付加における交替現象を扱った。

第 1 章は序論であり、本論文の構成を示し、エウエン語の概説並びに先行研究を提示した。第 2 章では音韻論の概要を述べた。2.1 でエウエン語中央方言の音素目録と各音素の異音の現れ方を説明した後、2.2 および 2.3 で正書法で表記された辞書の見出し語を分析して音節構造と音素配列上の特徴について述べ、語末には開音節より閉音節が現れやすい傾向が見られると同時に、語末に現れる子音は *n* と *j* が突出して多いことを指摘した。2.4 では弱化母音について論じ、弱化母音が第 2 音節以降 CV 音節および CVC 音節に多く現れること、語中の位置に関しては第 1 音節には弱化母音はほとんど現れず、第 2 音節以降、中でも特に第 2 音節に現れることが多いと指摘した。

第 3 章では形態論の概要を述べている。形態論上の特徴に基づき、どのような種類の接尾辞が付加されるかという観点から、エウエン語の語幹を分類している。本章では語類を名詞類、動詞、不変化語類、指示詞、疑問詞の 5 種に分けそれぞれの特徴を論じた。名詞類の特徴は屈折接辞として格接尾辞が付加されることである。名詞類の下位分類として名詞、形容詞、人称代名詞、数詞、指示代名詞、疑問代名詞がある。動詞の特徴は屈折接辞として時制接尾辞、人称接尾辞、形動詞接尾辞、副動詞接尾辞が付加されることである。不変化語類では接尾辞が付加されない。指示詞は名詞類と不変化語類にまたがるカテゴリーであり、指示代名詞、指示形容詞、指示副詞が含まれる。疑問詞は名詞類、動詞、不変化語類を横断するカテゴリーで、疑問代名詞、疑問動詞、疑問副詞、疑問形容詞が含まれる。それぞれの語類に付く接尾辞とその異形態の例を本章で示した。

第 4 章では第 3 章で取り上げた接尾辞の異形態交替についてパターンごとに整理して述べた後、いくつかの異なる接尾辞に共通して繰り返し現れる異形態交替をパターンごとに説明した。その際、異形態交替のプロセスを抽象的な「基本形」から実際の語形に現れる異形態に相当する「実現形」が派生するプロセスととらえ、音韻の弁別的素性を用いて説明した。音素を弁別的素性の束と考えると、基本形は値が未指定の素性を持つ形式ということであり、派生プロセスにおいて未指定の素性に対して値が指定される。この派生プロセスにおいて、一般的な音韻規則で派生可能なタイプと個別的な規則を想定する必要があるタイプがある。基本形に含まれるセグメントのうち異形態間で交替を示すものを抽象的な原音素として大文字の記号で表記する。例えば母音調和により *a~e* の交替を示すセグメントは、共通する素性の束とみなし、*a* と *e* を弁別する素性の値が未指定であるという意味で、原音素記号 *A* を用いて表記した。同様に *I* は *i~i*、*O* は *o~ø*、*U* は *u~u* という交替を示す母音を表す。これらの大文字で表される母音は素性 [Advanced Tongue Root] (以下 ATR) の値が未指定で、語幹につくときその母音から値の指定を受ける。接尾辞の異形態交替パターンの中には接尾辞頭音が変化して交替するパターンが数多く見られ、いくつかの接尾辞の間

に共通する交替パターンも見いだすことができる。それらを次のようにまとめた(括弧内に交替する音と具体的な接尾辞の一例を示す)。D (d~t: 与格 -DU (-do~du~to~tu))、L (l~n: 処格 - (dU)LA (-la~le~na~ne~dola~dule))、R (r~d~n~t~s: 定動詞現在 -RA (-ra~re~da~de~na ~ne~ta ~te ~sa~se))、Č (č~ň: 具格 -Č (-č~ň))、J (j~č: 定動詞未来 -JI (-ji~ji~či~či))、G (g~k~ŋ: 離格 -Glč (-gič~gič~kič~kič~ŋič~ŋič))、W (w~u~m~b: 対格 -W (-w~m~u~u~bu~bu))。これらの大文字の分節音は音韻素性の値が一部未指定で、語幹末から値を受け取ることで実現形が導かれる。D は有声性に関わる [voice] の素性が未指定であるが、t と d に共通する調音方法、調音位置の素性の値は定まっている。L は [vocalic]、[continuant]、[nasal] の値が未指定である。R は r~d~n~t~s に共通する調音位置の素性[+coronal]と[+anterior] の値は定まっておき、調音方法、有声性、鼻音性に関わる素性 [vocalic]、[voice]、[continuant]、[nasal]、[strident] の値が未指定である。Č は [voice]、[nasal]、[strident] の値が未指定である。J は [voice] の値が未指定である。G は [voice]、[nasal] の値が未指定である。W は [vocalic]、[consonantal]、[high]、[ATR]、[round]、[coronal]、[nasal] の値が未指定である。本章ではこれら未指定の値が指定される規則および母音の挿入の規則、またそれらの規則の適用順について論じた。エウエン語の音節構造は「(C1) V1 (V2) (C2)」であるため、接尾辞の付加によって子音クラスが生じる場合にはそれを回避するために母音が挿入される。挿入される母音 E の実現形には a~e~i の 4 通りの可能性があり、語幹の ATR/RTR の区別と語幹末の子音の種類(調音位置)によって決定される。さらに語彙的な特性に起因する規則的でない母音脱落についても論じた。そのような母音脱落は N 語幹と方向格接尾辞、一部の所有者人称接尾辞に見られる。

第 5 章では接尾辞異形態の決定要因になる条件について述べた。接尾辞の交替における異形態選択の規則について、関係する音韻条件・環境を整理し、どのようにして値の指定を受けるかも改めて整理した。音韻論的条件は、接尾辞に現れる母音を決定する母音調和と、接尾辞頭音を決定する語幹末音の 2 つに大別される。接尾辞の母音は基本形の段階では [ATR] の値が未指定であり、付加された語幹の母音が持つ [ATR] の値を受け取って実際の異形態が決定する。接尾辞頭音の交替は語幹末音の有声性、鼻音性が大きく関わることが多い。D (d~t)、J (j~č) は語幹末の有声性に同化する。L (l~n) は語幹末の鼻音性に同化する。G (g~k~ŋ) は語幹末の有声性と鼻音性の両方に同化する。Č (-č~ň)、R (r~d~n~t~s)、W (-w~m~u~u) は語幹末が /n/ であるかどうか(すなわち N 語幹かどうか)が条件となって鼻音性同化が起こる。Č は n の直後では鼻音性の同化が起こり ŋ で実現し、それ以外の場合は č で実現する。R は s 以外の無声音の直後では t、s の直後では s、n の直後では鼻音性の同化が起こり n、n と w を除く有声子音の直後では d、母音と w の直後では r が現れる。この交替は語幹末の複数の素性が条件となって同化が起こる。W は語幹末が母音である場合には w が現れ、n 以外の子音である場合には U が現れ、n である場合には鼻音性の同化が起こり m が現れる。

第 6 章では異形態交替の条件となっている音韻条件に基づき、語幹を分類した。語幹を母音語幹、無声子音語幹、有声子音語幹、鼻音語幹、N 語幹の 4 種類に分類し、接尾辞頭の D L R Č J G W がそれぞれのタイプの語幹の後ろで次の表のように実現することを述べた。

表：語幹の種類ごとの接尾辞頭音

	W	D	Č	J	G	R	L
母音語幹	w	d	č	j	g	r	l
無声子音語幹	ʊ~u	t	č	č	k	t~s	l
有声子音語幹	ʊ~u	d	č	j	g	d~r	l
鼻音語幹	ʊ~u	d	ň	j	ŋ	r	n
N 語幹	m	d	ň	j	ŋ	n	n

第7章では異語幹交替に関連する現象として、clitic（接語）の異形態交替や語の自由変異など、接尾辞以外の要素に見られる交替現象を扱った。cliticにも接尾辞と同様に直前の音への同化が起り、w~U、k~g、t~dの交替を示すものがある。語の内部で起こる自由変異による交替はg~jやlr~ll~ldおよびnr~nn~ndがある。このうちlr~ll、nr~nnは同化による交替で、g~j、lr~ld、nr~ndは異化による交替と見られる。

第8章では異形態交替パターンにおける不規則性が生じた原因を考察した。N語幹に接尾辞が付加される際は「語幹末のnと接尾辞の融合」および「N語幹における母音の脱落」という他の子音語幹に見られない現象が起こる。このことは共時的な規則のみで説明することができない。これらの現象について、通時的観点からの仮説を提示した。「語幹末のnと接尾辞の融合」は同一調音位置の「鼻音+閉鎖音」という連続において後ろの閉鎖音が脱落するという「mb > m, nd > n, ŋj > ŋ, ŋg > ŋ」のような通時的変化の影響によるものと考えられる。N語幹の母音の脱落は開音節が連続する環境で起こるが、N語幹以外では開音節の連続が母音の脱落を引き起こさない。これに対して、「基底では子音語幹の語幹末に母音がある」という仮説と「N語幹の母音を挿入母音と見なす」という2つの仮説を提示し、それぞれに問題点があるということ述べた。特に、前者では子音語幹と母音語幹の区別、後者では挿入される母音の種類を決定する条件が、大きな問題である。前者は語末に現れる母音について今後より詳細に検証することによって一般化できる可能性が残されているが、後者は語彙的に決定されている要素で一般化による予測が困難であることを述べた。

第9章で全体を総括した。